

達成目標を明確にした 国語科授業改造入門

大槻和夫先生を中心に、広島大学の学部・附属の国語科教員による共同研究が大成し、このほどそれが、「基礎学力保障のために」(全八冊)の第二巻として、「達成目標を国語科授業改造入門」という表題で上梓された。

本書は、「今日、子どもたちの人格発達のゆがみやくずれは、深刻な社会問題にまでなってきた。学力発達のおくれやゆがみもまた、その問題の一環をなすものとして、大きな問題になってきている。」(1ペ)という状況を真剣に受けとめて、「すべての子どもたちに確かで豊かな学力を保障する」立場からアプローチされたものである。そして本書では、この課題に対して、

- すべての子どもたちに保障すべき学力とは何か(基礎学力構造の体系的把握)
- その学力は、どのような「達成目標」に具体化できるのか(達成目標の明確化)
- その具体化された目標を達成するための教材や授業過程は、どのようなであればよ

いのか(授業改造への実践的示唆)

と、論理的に考え進められ、さらに理論と実践とを有機的に結ぶ工夫が図られている。

本書の構成は、以下のようになっている。

I 達成目標明確化の意義と国語科授業の改善

II 達成目標の設定と授業設計

III 達成目標明確化による授業過程の改造

IV 達成目標明確化による授業改造の実際

V 達成目標を明確化した授業の評価

まず、Iにおいて、達成目標を明確にすることが、「単なる評価法の技術的改善や新しい評価法の開発のためだけではない。それは、教科教育Aここでは国語科教育V全体は改造につながるものとして考えられなければならない。」(14ペ)ことを強調される。そして、次のようなくだりは、まさしくこの試みに首肯したくなるところである。

達成度評価は、学習者にとっては、何が達成でき、何が達成できなかったのかがよく

く分かって、達成できた喜びを味わわせるとともに、何が不十分であったのかを反省させるはたらきをもっている。一言にして言えば、「学習者を励ます評価」なのである。

また、教師にとっては、目標の設定、教育内容・教材の設定・配列、授業過程や方法を具体的に点検し、それらを改善する具体的な足がかりを与えるはたらきをもっている。それゆえ、達成目標の明確化とそれに基づく達成度評価は、授業改造に役立つのである。(19ペ、傍線は筆者)

「わかる授業」が希求される今日、どこまで理解できればその学習を達成できたことになるのかを学習者に明示することの大切さは、国語科の場合、ことに求められているところである。また評価は、過去および現在を判定することで終わるべきではなく、未来に生かされるべきものである。学習者にとっても、授業者にとっても、「いま」を反省しつつ、次の学習への手がかりとなるような評価法が要請されている。本書は、これらのことを実現する手だてを与えてくれているのである。

II・IIIにおいて、達成目標を設定する手順

および視点が説かれ、さらにそれらが、授業過程の構築に向けて「授業改造」の立場から明らかにされる。

IVは、以上の理論を受けた実践編となっている。低学年―言語事項(1)、中学年―物語文(1)、説明文(2)、作文(1)、高学年―文学教材(1)、作文(1)、以上七つの実践例が展開されている。これらは、発達段階および各領域において、理論がどのように実践化されるのかを知ることができてありがたい。低学年の部を担当された竹之内裕章氏は、「達成目標を明確にした授業とは何も特別な授業のことではない。子どもの実態を十分に診断し、その学力構造を明らかにすることで達成目標をあらい出す。次に、達成目標を達成するための場を設定する。そして、授業を進めていく過程において的確な評価を実施し、さらに修正、改善を加えていく。こうした一連の教育活動によって、子ども達に確かな学力を保障する、そのことにほかならないのである。」(99ペ)と述べられ、目標・内容・方法・評価の過程を自ら企画、運営できる授業者、すなわち主体的な、自律的教師にとっては、これらの課題は、日常的なことであることを

示唆されている。

終章のVにおいて、達成目標を明確化した授業の評価について、授業過程に即する形で、診断的評価、形成的評価、総括的評価の三者の観点から考究されており、ここで本書全体のまとめがなされている。

今日、評価のあり方の問題が、ことに実践の場において盛んに論議されている。これが評価の技術的、実務的改善にとどまらぬ、国語科授業を改造することにつながっていくべきであるとの本書の主張は、確かに受け継いでいかねばならぬものである。

本書の提起している課題、中でも、

。達成目標を、指導計画の中で、縦と横との関連について、どう体系的に組織・配列するか。

。達成目標を明確にして進める授業を、その授業過程において、実態に即してどう臨機応変に目標を変更しうるか、いかに柔軟に対処しうるか。

。文学の授業を、この立場からどう配慮するか。

という課題(本書では、これらについても明解な解答を示しているが)を、理論的・実践

的にさらに検討、検証していくことが、本書を真に活用することになると思われる。

(A5判、二二二ページ、昭和五七年一月、明治図書刊 二、四〇〇円)

(吉田 裕久)